



ハマツアの仮面

北西海岸インディアン（クワキウトル）

高さ30.0cm 幅27.5cm

奥行き75.0cm

北方民族博物館だより
—38号—

木彫り「熊」源流展（(財)アイヌ文化振興・研究推進機構助成事業）	2
講演会 木彫り熊の源流を求めて	
講習会 とんぼ玉づくり＜指導者コース／初心者コース＞	4
お知らせ・表紙・記事	5
ニュース	6

およそ80年の伝統を持ち、北海道の工芸品として全国に知られている木彫り熊も、その歴史については意外にも知られていないのではないのでしょうか。また、どこでも見ることができると思われ木彫り熊ですが、実は所蔵している博物館が少ないこともわかりました。

本展示会ならびに講演会は、同展実行委員会・旭川市と当館との共催で、(財)アイヌ文化振興・研究推進機構の助成事業として開催されたものです。以下にその概要をご紹介します。

木彫り熊：二つの源流

北海道の木彫り熊の源流は、大きく八雲と旭川の2系統に分かれています。八雲では農閑期の副業として、旭川ではアイヌ民族の木彫家によって、どちらも大正末期に製作が始められ、昭和初期には全道各地へと伝播しました。

八雲では、明治初期に尾張徳川家が入植、徳川農場を開きました。その二代後の当主・徳川義親氏が、農場で働く農民たちに冬の農閑期の副業として、スイスマヤげの木彫り熊を手本に製作を奨励したのが始まりです。1924(大正13)年、農場内で開かれた「第一回八雲農民美術工芸品評会」を開催した際に出品されたものが「北海道第1号木彫り熊」として、モデルになったスイスの熊とともに八雲町郷土資料館で展示されています。腕のよい彫り手を講師にして講習会を重ね技術を向上させ、「やくも」の焼印の入った木彫り熊は全国に名を知られるまでになりました。しかし、第二次世界大戦により生産・販売が困難になり、現在は公民館での講習は続けられているものの、本業として木彫りに取り組む人はわずかです。

一方、旭川では大正の末期に近文アイヌ・コタン(集落)の松井梅太郎氏が、熊を捕り逃した悔しさで彫った熊が最初とされています。旭川市も製作を奨励し買い上げを行ったため、以降、アイヌ民族の生来の木彫りの技術に支えられ、多くの木彫家を輩出しました。

しかし、北海道アイヌの伝統的な文化では、動物や人間の姿を形作ると霊が入り込むと考えられており、特にクマは「山の主」と畏れ敬われてい

たので、幣冠や捧酒箸など儀礼具に使われるのみでした。当初は、木彫り熊を作って売ることには納得しない古老たちも多くいたと言われています。

しかし、旭川では軍隊の基地があったことや戦後の海外向け需要にも支えられて、木彫り熊製作が続けられ、昭和30年代からの北海道観光ブームでは、アイヌ文化の魅力ともあいまって、大きな発展をみせることになりました。阿寒、平取、札幌などで木彫家として活躍する人のなかには、旭川の出身者や旭川で修行をした人、旭川からの技術指導を受けた者が少なくありません。

展示では、アイヌの伝統的な儀礼具を紹介した上で、八雲からは昭和初期に製作された木彫り熊と、故柴崎重行氏や現在もただ一人製作を続けておられる引間次郎氏の作品など、5人の彫刻師の木彫り熊を展示しました。旭川からは、大正末期から昭和初期の作品をはじめ、昭和30～40年代のものを中心に近年のものまで19人の彫刻師による約40点を借用し、展示しました。

阿寒からも旭川出身の藤戸竹喜氏の3作品と、旭川で修行された松田鉄男氏の作品をお借りすることができ、昨年と同展に出品されていない新たな作品をご覧いただくことができました。

また、北海道文化財団制作のビデオ「八雲の木彫り熊」も上映し、木彫り熊が完成するまでの様子も紹介しました。



展示の様子

家庭で大事にされてきた木彫り熊たち

以上のように、実行委員会で本展のために博物館や彫刻家の方々から借用したものは約60点でしたが、今回はそれを上回る70点あまりの木彫り熊を多くの方々からお寄せいただきました。

木彫り熊の足の裏や台座には、製作年（月日）・製作地・製作者が彫り込まれていることがあります。大量生産品が出回るようになる1960年以前を目安に、詳細な情報の付随した、なるべく古いものをと募集したところ、北海道内外より100件以上のお電話やお手紙をいただきました。古いものでは、旭川の80歳代半ばの女性が嫁いだときからあったという60年以上前の木彫り熊もありましたし、「旭川アイヌ ○○作」などの銘が彫られたものもありました。松井梅太郎氏の作品も4点が寄せられ、いずれも本物であることがわかりました。また、戦前の「やくも」の焼印の入ったものも多数あり、時計に仕立てられたものや、野球をする熊などのユニークなポーズのものもありました。遠くは京都から寄贈していただいた昭和20年代に製作されたものもありました。地域も札幌、白老、函館、釧路、阿寒、帯広など全道にわたり、修学旅行の記念品購入したものや、購入時に熊を彫った人と一緒に撮影した写真を送ってくださった方もいらっしゃいました。お一人で何点もの木彫り熊を収集され、歴史にお詳しい方もいらっしゃいました。

また、現在よく見かける鮭をくわえた熊ばかりではなく、鮭を背負ったもの、親子、ブドウによじ登るものなどさまざまなポーズがあり、花瓶に仕立てられたものや、記念品として贈られたものなど、多様な木彫り熊を紹介することができたのも、大きな成果でした。

いずれも30～40年以上、さまざまな思い出とともに家庭で大事にされてきたものばかりでしたが、このうち20点以上もの木彫り熊が当館に寄贈されることになっています。

木彫り熊の盛衰

第二次世界大戦を経て、1960（昭和30年代後半）年ころから始まった北海道観光ブームにより

1970年代半ば（昭和50年ころ）まで北海道みやげの主力として知られてきた木彫り熊も、昨今の販売数は低迷を続けています。住環境の変化や、キタキツネ・シマフクロウといった新たなモチーフに人気が移ったことも一因と思われます。最盛期に600人とも1,000人ともいわれた彫り師の数も、現在では十分の一以下になり、全道で数十人ほどと思われます。

関連講演会「木彫り熊の源流を求めて」

会期最初の土曜日には、講演会を開催しました。最初に当館学芸員の齋藤が北海道の木彫り熊の歴史を簡単に概説し、後半は旭川市の木彫家・平塚賢智氏から、実際に製作に携わってきた立場からの具体的なお話をしていただきました。

平塚氏は大正8（1919）年のお生まれで、14歳のときに平塚木芸舎を主宰、以来今日まで65年以上にわたり、木彫り熊製作一筋に打ち込んでいらっしゃいます。この間、松井梅太郎氏や彫刻家の故・加藤顕清氏に師事して独自の作風を確立し、木彫り熊を工芸品の域まで高め、数々の受賞歴もあります。

品質向上や意匠（デザイン）登録に努めてこられたこと、戦前と戦後の変化など業界の裏話もいろいろとお聞きし、また手入れや修理の方法など具体的で役に立つお話もしていただきました。巧みな話術と長年の経験談に参加者は引き込まれ、質問にも丁寧に答えていただきました。



この展示会は、多くの方々に支えられて開催することができました。木彫り熊とアイヌ文化について、いま一度見直す契機となれば幸いです。

（学芸課 齋藤 玲子）

講習会 | とんぼ玉づくり<指導者コース/初心者コース>

平成12年5月20日(土) 10:00~15:00 (指導者コース)

5月21日(日) 14:00~15:30 (初心者コース)

当館講堂

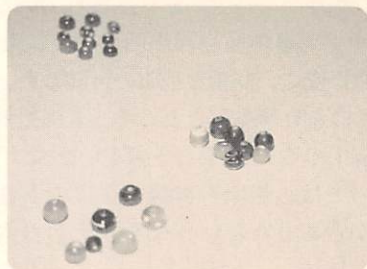
講師：笹倉 いる美 (当館学芸員)

北海道立北方民族博物館では、平成5年度にはじめてとんぼ玉に関する講座を開催しました。栃木県宇都宮市に在住のとんぼ玉研究家で製作者でもある木村正道氏を講師にむかえ、とんぼ玉の歴史について語っていただくと同時に実演製作をしていただきました。

このときの参加者から、自分たちでもとんぼ玉をつくらしてみたいという声が多く寄せられたため、次年度には木村氏を講師に、参加者が実際にとんぼ玉を製作する講習会を開催しました。以来当館学芸員が講師をつとめながら、毎年行ってきた大変好評な講習会です。

今年度は5月20日と21日に行いました。そして今回はじめて指導者コースを設けました。何度もとんぼ玉づくりの講習会を行ってきているため、二度以上にわたる参加者からは、ただ玉をつくるだけではなく、文様をいれるなどより高度な技術を学びたいという要望がだされていました。また、教員の初任者研修や造形教育連盟の研修会等の場で指導を行う機会があり、学校で児童・生徒に指導するために、材料入手の方法や、準備や諸注意についても詳しく知りたいという問い合わせも寄せられるようになりました。このため、はじめてとんぼ玉づくりをされる方とは別にコースを設定し、とんぼ玉をつくるのに適したガラス棒や、道具、製作する際のこつなどを紹介しました。

とんぼ玉は溶かしたガラス棒を、離型剤を塗った鉄芯^{しん}にまきつけて作ります。午前中はなるべく均等にまるい形ができるように練習し、午後からはガラスひごを自分でつくり、そのガラスひごを使って線文様や、水玉文様をいれてみるということをしました。



とんぼ玉

当館でとんぼ玉づくりの講習会を行っているのは、北方諸民族の中でとんぼ玉を含めたガラス玉、ビーズ類が交易品として重要な位置をしめてきたため、とんぼ玉づくりを通じて北方諸民族の文化についてふれていただくことを目的にしているからです。製作の前にそうした部分についても説明を行うのですが、やはり参加者はとんぼ玉を作ることのほうに興味があるようです。サークルのようにして、年に何度も行ってほしいとも言われますが、当館の施設や体制の都合でその要望に応えるにいたっていません。また、「とんぼ玉」という言葉も、はじめて講座を開催したころは、一体何をさすのかわからないという状態でしたが、年を経るにしたがって、この地域では定着しつつあるようです。今回は参加希望の方をだいたいお断りするようなことにまでなってしまう、募集方法について課題を残しました。ただ、他の講座等への関心が同じように高いかという点、必ずしもそうではなく、博物館で行われている体験的な事業について、博物館で行う意味を考える必要があるかと思います。とんぼ玉づくりについては、前述したように教員へ、また不登校児童への指導を依頼されることもあり、同じことを行うにしても、目的は随分違ってくるように思います。

(学芸課 笹倉 いる美)



講習会の様子

今号の表紙

—ハマツアの仮面(クワキウトル)—

一般に北西海岸インディアンは、夏から秋にかけての食料調達の時期には家族や親族単位で移動生活をしたが、冬になると一つの集落に集まり「冬の儀式」をおこなった。「冬の儀式」は秘密の入会式を伴う集団(秘密結社)によっておこなわれ、そこでは各部族に語り継がれている神話が劇として上演される。

クワキウトルの最高位の秘密結社集団は「ハマツア」で、表紙の仮面は「冬の儀式」の際、「ハマツア」の踊り手が付けるワシの仮面である。

※北西海岸インディアン：アラスカ南部からカナダ北西岸、アメリカ・ワシントン州の沿岸に居住してきたインディアンの総称。イヤク、トリングット、ツィムシャン、ハイダ、クワキウトル、ヌートカ、沿岸セイリッシュなどの諸族を含む。

みんぞく こうこ はくぶつかん
in 北海道

このコーナーでは当館の活動に関連する分野の新聞記事のうち、道外ではあまり紹介されていない情報を掲載します。

4/12(水)～4/16(日)

「チセコロウタラ アイヌの家族」連載/AS

4/22(土) 文化財保護審議会は枝幸町の目梨泊遺跡出土の319点を重要文化財に指定するよう文部大臣に答申/M

4/28(金) 今年で4年目となるアイヌ詞曲舞踏団モシリの公演が開幕、弟子屈町/D(夕)

5/22(月)～二風谷アイヌ資料館館長の萱野茂氏のインタビュー記事「私のなかの歴史 言葉を守り続けて」を連載/D(夕)

6/23(金) 「アイヌ神謡集」を編纂した知里幸恵さんをしのぶ集いが旭川の北門中学校で/AS

※AS：朝日新聞 D：北海道新聞 M：毎日新聞
複数紙掲載の場合は扱いが大きい方を紹介しています。

第15回特別展 トーテムポールとサケの人びとー北西海岸インディアンの森と海の世界ー Peoples of Totem Poles and Salmons

北アメリカ・北西海岸では、深い森林と川を遡るサケの大群を背景に、先住民が独自の文化を形成してきました。自然を巧みに利用した北西海岸インディアンの伝統的な生活様式、トーテムポールに代表される特異な精神文化、現代に息づく伝統などについて紹介します。

■主催 北海道立北方民族博物館

■協力 国立民族学博物館、北海道開拓記念館、
萱野茂・二風谷アイヌ資料館、岡田淳子氏、
網走市、大滝村、株式会社 総北海

■開催期間 平成12年7月18日(火)～9月24日(日)

■会場 北海道立北方民族博物館特別展示室

■関連講演会「トーテムポールとサケの人びと」

伝統的な社会生活から、サケ漁・捕鯨などの生業をめぐる現代の諸問題まで、北西海岸インディアンの文化と現状について紹介します。

講師：岡田 淳子氏(北海道東海大学)

ダン グッドマン氏(財団法人日本鯨類研究所)

岩崎 まさみ氏(北海学園大学)

日時：7月29日(土) 13:00-16:30

会場：当館講堂



©Wayne F. Hewson

■執筆者・出版社から 贈呈を受けた書籍等 (4月～6月)

- ・梅崎義人 1999『動物保護運動の虚像—その源流と真の狙い—』成山堂
- ・江上壽幸 2000『北海道のやきもの史に名を残した人と窯と作品図録』新日本教育(株)
- ・Christoph Brumann 1999『Die Kunst des Teilens』LIT
- ・斜里町立知床博物館『知床の鳥類しれとこライブラリー1 北海道新聞社』
- ・(財)アイヌ文化振興・研究推進機構『建てる—祖先の時代のチセづくり—』(VHSビデオテープ)
- ・(財)アイヌ文化振興・研究推進機構『織る—樹皮衣—』(VHSビデオテープ)

■主な来館者

- 6/17(土) 国立歴史民俗博物館
館長 佐原 真氏
奈良国立文化財研究所
埋蔵文化財センター
センター長 沢田 正昭氏
- 6/22(木) 千歳サケのふるさと館
学芸員 高橋 理氏

■行事案内(7～10月)

- 7/18(火) - 9/24(日)
第15回特別展
「トーテムポールとサケの人びと—北
西海岸インディアンの森と海の世界—」
- 7/20(木・祝)
講座「北西海岸インディアンの歴史と文化」
- 7/29(土)
講演会「トーテムポールとサケの人びと」
- 8/12(土)
講習会「北西海岸インディアンのミニ

チュア・ボタンロープづくり」

9/9(土)

博物館クラブ「鹿笛を作ろう」

10/21(土)

北方文化セミナー

「蝦夷地の社会と文化—中世アイヌ社会から場所請負期まで—」

講師 田端 宏氏(道都大学)

小林 真人氏(北海道開拓記念館)

中・近世を中心に、北海道アイヌの社会と文化や、和人との関わりについて紹介します。

10/26(木), 27(金)

第15回北方民族文化シンポジウム

テーマ「北方諸民族のなかのアイヌ文化—儀礼・信仰・芸能をめぐって—」

北方諸民族文化とアイヌ文化における動物送り儀礼をはじめとする信仰や芸能の比較を行い、北方におけるアイヌ文化の位置づけを探ります。

発表者 国外3名(ロシア)・国内6名
谷本一之氏(道立アイヌ民族文化研究センター)

甲地利恵氏(道立アイヌ民族文化研究センター)

大島 稔氏(小樽商科大学)ほか

■その他の行事報告 (4～7月)

5/3(水・祝)～5/7(日)

常設展示ガイド

7/2(日) 博物館クラブ「トーテムポールづくり①」

7/8(土) 博物館クラブ「トーテムポールづくり②」

■観覧者動向(4～6月)

	常設展示	企画展
4月	1,054	
5月	2,456	
6月	3,511	3,026
計	7,021 名	3,026 名 (6/6～7/2まで)

■友の会会員募集

北方民族博物館友の会会員を募集中です。友の会では季刊誌「Arctic Circle」や「友の会だより」をとおして北の文化を紹介しています。年会費は3000円です。すでに会員になられた方は、お知り合いの方にもご紹介ください。詳しくはお問い合わせを。

■編集後記

先日、木彫り熊源流展の関連事業で旭川在住の木彫家、平塚賢智氏に当館で講演していただきました。聞いている最中は、失礼ながらお世辞にもまとまりがある話とは思えませんでした。講演会の参加者は時に笑い、時に押し黙りながら氏の話に聞き入っていた様子でした。講演が終わってみると私の頭の中で氏の話がまとまっているから不思議なものです。

この時期、修学旅行の中・高校生や「遺跡めぐりツアー」の団体など、多くの人びとが当館に見学に来ます。様々な年齢層の方々にわかりやすく北方の歴史や文化について話しをするのも学芸員の重要な仕事の一つですが、氏の講演を聞きながら、まだまだ修行が足りないと感じました。(角)